

今は昔。ネパールのポカラで、朝、ラジオを聴いていると、坂本九の歌が流れて来た。日航機墜落のニュースであった。ポカラから首都カトマンズに移って、仏教の保存活動をしていたシャンティ・クティにお世話になった。スタッフはそこに住んでおらず、勝手に知った旅人が食費を出し合い、自炊していた。そこに名古屋でアメリカ西海岸風の軽食店をやっていた人がいた。チャパティ(小麦粉に少しの塩を入れ練つてものを平らに拓げて焼く、最も大衆的なパン)は、現地ではカレーにつけて食べるが、彼は味噌を塗ったり、チーズを載せたりするなど、工夫していた。

彼はアメリカ西海岸風の文化に浸っていたことを反省していた。また、日本人旅行者が「人材」と書かれたTシャツを着ていたことに呆れていた。日本人旅行者と集おうとせず、ネパールの人たちと深く交流していた。

旅行者向けでない食堂で、その彼とたまたま出会った。彼はその常連であるらしかった。そこで彼は、子どもに「赤信号でも渡れ」と教えるという話をした。

日本に住んでいると、様々なきまり(法制・常識)とそのきまりを守る人々の中に暮らすことが当たり前のように感じられる。しかし日本から外に出ると、当たり前のように感じられていたきまりが異なっていたり、あるいはきまりを守るというきまりが曖昧であったりする。そこを旅するには、あるいはそこで生き抜くには、そこでのきまりときまりの守られ度合を知るだけでなく、その前提を受け入れて、行動しなければいけない。

車の通りが少ない道路にある信号が赤だからといって、立ち止まっている人間では、生き抜くことができない世界がある。きまり

は自分たちが生活しやすいようにとできたはずだ。きまりによって不自由になるのはおかしい。

大学の法学科で勉強し始めた頃、こんな話を聞いた。日本の敗戦後、食糧が配給されていた時代、配給では不足、闇市が盛んだった。その頃、ある裁判官は闇で食糧を仕入れるのを潔しとせず、餓死したという。

いまだに年金記録不備による問題は解決していない。国がすることに間違いはないと信じ、自分の年金額を疑わなかった人は多かったのだろう。そこにはきまりを疑わなかった人たちと、きまりを守らず仕事をした公務員がいた。

近所の畑にはカボチャが食べ頃になってきた。本来、土地は誰のものでもないと思っている私はそのカボチャも、本当のところは、その畑の主の物とは思っていない。だがきまりではそれはその畑の主の物であり、それを私が取れば、私は泥棒ということになる。そのきまりはこの社会の秩序を保つ為に必要なものである。この秩序が崩れれば、私は暮らし辛いと思う。だから私はカボチャを取らない。

きまりにより暮らしやすくなり、きまりにより暮らし辛くなる。きまりは私たちが意識的あるいは無意識的に作り上げたものである。守るべきでない時には守らず、守るべきでないものは守らないことによってこそ、きまりは私たちの生活に役立ってくれる。それがきまりを活かすことである。

小さな子どもには、「赤信号では渡るな」と教えるのが、現代日本で生き抜くには必要だろう。しかしいつかは、「赤信号でも渡れ」と教えなければいけないのである。

(2009年6月芒種)

【雑想】赤信号でも渡れ

鍼灸師・法学士

鈴木齊観 せいかん